

「おかえりモネ」展の来場者が
10万人を突破

長沼フートピア公園と遠山之里で開催している連続テレビ小説「おかえりモネ」展の来場者が12月16日、10万人を突破しました。

節目の来場者は、仙台市の阿部英明さん(70)と妻の礼子さん(63)。二人には、長沼フートピア公園の佐藤純所長から市の木工品などの記念品が手渡されました。

英明さんは「おかえりモネ展で登米の新しい魅力を知ることができました。パネルなどの展示物を見るとドラマを思い出しますね。また登米に来たいです」と笑顔で話しました。

「おかえりモネ」展は令和4年10月末まで開催します。



10万人目の来場者となった阿部さん夫婦(真ん中、右)と佐藤所長

シンポジウム「～森に

生きる～『おかえりモネ』が描いた登米

市では12月19日、アフターモネに向けて「おかえりモネ」の魅力をさらに広め、市の魅力を再認識するため、シンポジウム「～森に生きる～『おかえりモネ』が描いた登米」を開催しました。当日の基調講演とパネルディスカッションの様子を紹介します。



左からモデレーター佐藤万里子さん、市観光シティプロモーション課小野寺崇、一木正恵さん、竹中雅治さん、田上佑輔さん、佐藤純さん

「林業考証としてスタッフへ伝えてきたことは」

竹中 森林組合を舞台にしてモネという少女が育っていく姿を描く。これは森林組合にとって革命的だと思いましたが。林業をどういった姿でドラマの中に取り入れてもらい、伝えられるかを考えていました。私は森林組合で仕事をしている人たちがどのように考えているかを常々考えながら仕事をしていたので、そこからリアルな林業とドラマをつなげていくかを意識していました。ドラマで描かれていた森林組合は本当に理想的な形で、地域に根差して生きていくということが林業のありべき姿なのかなと思って100年の森づくりというのを

を頭の中に描きながら脈々とやってきたその姿が描かれていた。また、ドラマの中でこれほどまでに組手仕が出てくるとは正直思っていませんでした。組手仕は震災時、避難所の人たちの生活がとて大変で隣の人の間をつくる間仕切りなどプライバシーを守る役割としてとても活躍しました。組み立てて、またばらして使うということも盆だなを制作するシーンとしてドラマの中で表現してくれて、うれしく思います。

「観光面での効果は」

佐藤 ドラマの中で森や山などの自然をきれいに映していただき観光に携わる者として本当にありがたかったです。

シンポジウムの様子が はっとエフエムで放送されます

シンポジウム当日の音声が登米コミュニティエフエム(はっとエフエム)にて、下記の日程で放送されます。

【内容・放送日時】

- ▶ 基調講演=1月23日(日)午後5時
- ▶ パネルディスカッション=1月30日(日)午後5時

放送が開始し第一週から長沼フートピア公園の200台分の駐車場が平日でも満杯になるほど、たくさんのお客さんに来ていただきました。11月7日には、フートピア公園としても2年振りに、規模の大きなイベントとして「ThanksなないろDAY」を開催しました。車のナンバーを見る限り、北は帯広から南は高知まで全国から来ていただき、ドラマを通して全国に登米の魅力が伝わっているのだと感じました。登米にはたくさん道の駅がありますので、観光業界全体がつながり、頑張っていきたいと思っています。

【問い合わせ】まちづくり推進部観光シティプロモーション課(観光シティプロモーション係)
☎0220(23)7331

来場者Interview



長倉 智幸さん(49)
南方町北本郷

ドラマの中で、登米市がたくさん映り、全国の人たちに知ってもらえてうれしく思います。撮影に関わった方々の努力のおかげで、登米市の魅力を再発見させてもらったのだと考えさせられた講演会でした。



阿部 俊則さん(60)
栗原市

人の気持ちに寄り添うようなドラマ構成が興味深く、楽しみに見させていたが、楽しんでいる」というテーマを特に意識して制作されていたのだと、改めて感じることができました。

本市が舞台の一つとなり、5から10月まで放送された連続テレビ小説「おかえりモネ」。市の自然や食文化など、さまざまな魅力が美しい映像で表現され、全国から多くのドラマファンが訪れるなど、大きな反響がありました。

市では12月19日、チーフとしてドラマを演出した一木正恵さんを迎え、「おかえりモネ」が伝えたかったことをテーマに基調講演を開催。

基調講演では、一木さんが「森林や伊豆沼、登米町の歴史的な街並みなど、良い所がたくさんあり、どう紹介するかをずっと考えていました」とドラマ演出を振り返りました。また、登米での題材を探していく中で、「森林セラピーとラフターヨガの衝撃」「やまと診療所の衝撃」「震災時に果たした役割」「唯一無二の個性」を上げ、制作時の大変だったことやそれぞれのシーンに込めた思いなどを語りました。

その後、ドラマに携わった竹中雅治さん(登米町森林組合)と田上佑輔さん(医療法人社団やまと)、ドラマを活用して地域振興を手掛けている佐藤純さん(長沼ふるさと物産)とともに、今後「おかえりモネ」をどのように生かしていくかを考えるパネルディス

カッションを開催。その様子を抜粋して紹介します。

「医事考証として関わる中で意識したことは」

田上 菅波先生や中村先生の背後の設定や(医師としての)思いや使う資料について相談を受けていました。思っていた以上に相談が多く、思い切り関わらせてもらえて楽しかったです。また、ドラマの中で菅波先生が感じていたことは私も感じています。東京大学で外科医をやっていた時に震災が起きました。この有事に被災地へ駆け付けなくてはならないと思います。この地を訪れました。活動を続けていくと、同じ思いの人たちが集まって、現在はドクターが数十人、代わる代わる訪れて活動しています。

一木 「医師としてこの考え方は妥当なのか」「このシーンだったらどのような本を読んでいるのか」といった部分を相談させていただきました。カフェのような敷居の低い場所での医療についての相談を受けるということをされていたので、まさしくその設定を採用し、まねさせていただきました。